

日本のユーフォニアム発祥の地、横浜 歴史的なユーフォニアムの名称について

横浜ユーフォニアム合奏団代表 深石宗太郎

時は幕末、生麦事件が起きた文久2年（1862年）に、幕府により西洋式陸軍が創設されました。元治元年（1864年）に英国陸軍が横浜に駐屯し、軍楽隊の演奏が行われ、慶応元年（1866年）幕府はフランスの将校から信号ラッパの伝習を受けています。明治元年（1867年）英国第10連隊第1大隊軍楽隊長としてフェントン（John William Fenton）が横浜に着任しました。フェントンは後に初代「君が代」を作曲したことで知られています。翌明治2年（1869年）に我が国最初の吹奏楽団、薩摩藩軍楽隊が結成、横浜、本牧の妙香寺においてフェントンの指導を受けました。彼は32名編成のバンドを編成し、英国のディスティンを仲介として、ロンドンの楽器店に楽器一式を発注しました。この楽器が到着するまで、洋式に作った日本製の横笛、ラッパ、太鼓等の教育が行なわれています。この年に戊辰戦争が終結、版籍奉還が行われました。

翌1870年7月31日（旧暦明治3年7月4日）、待望の楽器を積んだ船が横浜港に到着しました。さらに日本海軍の創設者川村純義は、フェントンを通じてロンドンのベッソン社に楽器購入を依頼し、1870年12月17日に横浜港を出港する船に、吹奏楽器2組、64点の楽器購入代金の前金1500ドルを託しています。これが英国への2度目の注文で、この楽器は翌明治4年（1871年）に横浜港に到着しました。この年に廃藩置県が行われ、薩摩藩軍楽隊は鹿児島に帰りましたが、海軍に出仕した隊員も多く、翌明治5年（1871年）には陸軍と海軍が分離し、陸軍軍楽隊と海軍軍楽隊が発足しています。

話は戻りますが、薩摩藩軍楽隊の最初の伝習生に森山孫十郎という鼓手がありました。残念な事に明治3年1月12日に横浜において病没しました。英国から最初の楽器が到着する前の話です。その墓前に当時の隊員の名前と献辞が彫られた献灯が建てられました。この献灯には30名の名前が認められますが、この最初の伝習生達の担当楽器について後年研究が行われ、明治4年に海軍楽手として入団した折田徳道に依頼し、当時の記憶から隊員名簿が作成されました。この隊員名簿の一覧によると、「尾崎惟徳 中位大ナル楽器ニシテ（ユーホネン）ト稱セシナラン」と読む事が出来る人物がいます。また、海軍軍楽隊初代軍楽長の中村祐庸の遺録によりますと、「伝習生人名 ユーホーニオン 尾崎平次郎」との記載があります。これらの資料から、英国より日本に初めてやってきた吹奏楽の楽器一式の中に、「ユーホネン」「ユーホーニオン」と呼ばれた楽器が含まれていたことが明らかになっています。

さて、この「ユーホネン」「ユーホーニオン」などと呼ばれた最初の英国製の楽器購入の話になりますが、この取引を仲介したとされる英国のディスティン社は、1845年にロンドンで店を構え、翌年より国内におけるサクソルン（Saxhorn ベルギーのアドルフ・サククスが考案した一連の金管楽器）の代理店になっています。

1850年よりディステイン社はサクソルンの委託生産をしていたのですが、アドルフ・サククスと経営方針が合わず、1857年頃にこの契約を解消し、以来ディステイン社のカタログからサクソルンの名前が消えて、上向きベルの金管楽器（おそらくサクソルンバスと呼ばれていた楽器、小バス）に

「Euphonion」という名称を対応させています。これに対抗するために、アドルフ・サククスは自身が制作したサクソルンを英国に持ち込み、サクソルンで統一された金管の楽団を結成、これが今日の英国の金管バンド（ブラスバンド）として発展しています。

1868年にディステイン社は英国のブージーに買収されて、ブージー社(boosey & co.)が金管楽器の生産を引き継ぐ事になりました。薩摩藩軍楽隊の使用する楽器の注文をディステインに出したのがこの翌年の1869年ですから、楽器の生産はブージー社に引き継がれています。その後、1874年にブージー社の楽器開発者によって、現在の私達の使用するユーフォニアムに装備されているコンペンセイティングバルブシステム（セミダブル方式）が発明されました。1940年にブージー社はベッソン社と合併し、現在はベッソンブランドとして足跡を残しています。1984年には我が国初のセミダブル方式の国産のユーフォニアムがヤマハから発売されました。

話が進みすぎました。フェントンに話を戻しますと、この後フェントンは明治5年に海軍軍楽隊、明治7年に宮内庁楽部のお雇い外国人となり、軍楽隊の隊員、雅楽を演奏する伶人に欧州楽（吹奏楽編成）を伝えています。当時の宮中の記録から、「ユーホー子ン（子は子年、ねずみ年の子です。ユーホーネン）」「ヒー、フラット、イウフヲニアン（フは小文字の表記）」などの楽器名の記載を読み取ることができます。

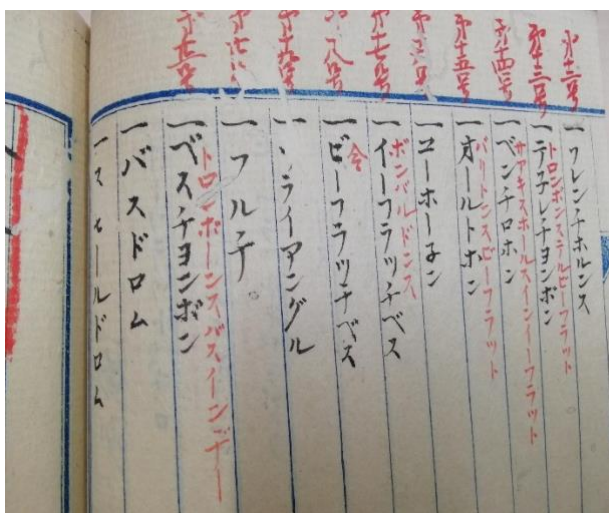
翌明治8年に西南戦争が起こり、海軍軍楽隊は鹿児島に派遣され、城山の西郷軍に惜別の演奏を送っています。この後、海軍軍楽隊は明治12年にお雇い外国人としてドイツ人のエッケルトを雇い、エッケルトは明治20年に宮内庁楽部に雇われています。この年に東京音楽学校が創設されました。海軍や宮中で使用する楽器は英国製のまま、楽器の呼び方はドイツ式となり、「ユーホニオン」などの英国式の名称とドイツ式の「バリトン」の名称が混在し、また、フランス式を採用した陸軍軍楽隊の「小バス」などの名称の使用も相まって、様々な名称が国内に共存することになりましたが、異なる国のシステムを導入したために、楽器の名称だけでなく、演奏する楽曲やパート譜の記譜法、教育方法も異なり、奏者間の交流も容易にはできないという事態が起こりました。このような状況ではありましたが、吹奏楽は民間団体の発足を迎え、コンクールが開催されるなど、活動が盛んになりつつありましたが、第二次世界大戦の戦況の悪化で活動の停止を余儀なくされてしまいました。

昭和20年の敗戦により陸海軍の軍楽隊は消滅しました。憲法9条と日米安全保障条約の締結を背景とし、自衛隊が創設されましたが、自衛隊音楽隊は米国式の吹奏楽を導入し、米国式の吹奏楽が民間にも広く普及することとなり、戦前の英独仏の異なるシステムの併存という問題は解決しました。戦前の教育を受けた優秀な音楽隊員が復員し、様々な音楽活動を行う事で民間の洋楽（吹奏楽）が発展しました。「小バス」「バリトン」の名称は次第に使われなくなり、「ユーホニウム」「ユーフォニウム」の名称と共

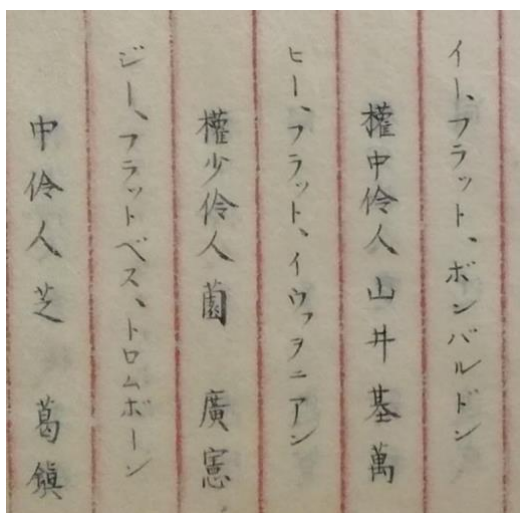
存する形で、音楽大学などの民間の研究機関やプロの奏者たちなどが「ユーフォニアム」を使用することが多くなりました。そして近年はさまざまなメディアで「ユーフォニアム」の楽器名が広く一般国民に紹介され、ようやく私達の楽器は国内で統一された名称として「ユーフォニアム」の楽器名を使用する事ができるようになりました。

参考文献

- 「海軍軍楽隊」楽水会編 国書刊行会 1984年
- 「陸軍軍楽隊史」山口常光 三青社 昭和43年
- 「洋楽導入者の軌跡」中村理平 刀水書房 1993年
- 「御沙汰留」雅楽局 宮内公文書館蔵 自明治3年 至明治12年
- 「欧州楽録」式部職 宮内公文書館蔵 自明治7年 至明治8年
- 「天長節書類」式部職 宮内公文書館蔵 明治9年
- 「西郷隆盛惜別譜」横田庄一郎 朔北社 2004年
- 「概説・日本の近現代史に息づく吹奏楽」戸ノ下達也 横浜ユーフォニアム合奏団蔵 2021年
- 「日本におけるユーフォニアムの歴史」深石宗太郎 洗足論叢 2007年
- 「明治～昭和初期における国産金管楽器についての考察」深石宗太郎 洗足論叢 2008年
- 「第二次世界大戦と戦後復興期における日本のユーフォニアムについての考察」深石宗太郎 洗足論叢 2009年
- 「ニューグローブ音楽辞典（英語）」



「欧州楽録」欧州楽器名称
ユーホー子ン（ユーホーネン）



「明治九年天長節書類」欧州楽役割
ヒー、フラット、イウフヲニアン